

TOKYO SHOKO RESEARCH

# TSR 情報

新春特集号

Vol.37

埼玉県業種別  
収益ランキング

埼玉県  
増収率ランキング

第2弾

特集

今考えるSDGs

～埼玉の最先端企業を訪ねる～

日本一の  
埼玉の  
未来



# 社内外でパートナーシップを ～アイル・ホールディングス株式会社



▲左から伊藤将課長、山崎操課長、植村敬仁営業本部長

さいたま市を拠点に、グループ8社3,343人を抱えるアイル・ホールディングス株式会社。県内において環境、福祉、そして産業廃棄物の分野では突出した存在だと言っていいだろう。

まずは植村敬仁営業本部長から説明をいただいた。「グループ会社8社、業務のすべてがSDGsにつながっています。グループとしてのSDGsの活動はもちろん、環境と福祉をテーマに活動するグループ各社の業務そのものがSDGsなのです。アイル・コーポレーション株式会社は事業を展開する中で、公共施設の指定管理者業務を受託するようになりました。地域の課題、県内の課題に対しての提案一つ一つがSDGsです。



▲寄居町の名産「風布みかん」を買い取って加工する。地元の皆さんを雇用するのも、SDGsの一環だ

例えば、寄居町の風布みかんは、400年以上の歴史を持ちます。弊社は寄居町の指定管理者として、観光農園シーズン後に余剰となった町内のみかんを買い取り、地域の方と協働してジュースに加工し、町内の販売店にご協力いただき販売してもらうという流れで、町全体を巻き込んだ六次産業化の推進を図っています。町内連携に取り組む過程で、このジュースはにぎわい創出・活性化の仕組みも担っています。その名も『寒熟寄居蜜

柑ジュース』。果汁100%のこのジュースは、そのまま美味しく飲んでもらうのはもちろん、地域・県内企業と連携し、バームクーヘンやビールの原料としても使用されています。これは、寄居町農産物加工施設『里の駅 アグリ館』の指定管理事業の一例です」



▲オレンジがまぶしい「寒熟寄居蜜柑ジュース」。「里の駅 アグリ館」などで販売しています。まさに「六次化」の成功例と言っていいだろう

## 指定管理者の視点から見えてくる 地域の課題

PPP推進部まちづくり推進チームの伊藤将課長が、より具体的な話を続ける。

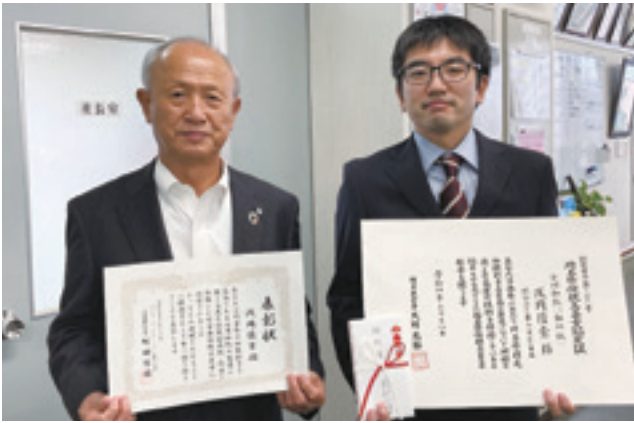
「SDGsの勉強会に参加している中で初めて理解したことなのですが、『日本はパートナーシップができていない』ということ。例えばみかんの話で言えば、余剰品を買い取ってから販売まですべてを弊社でやろうと思えばできるのです。ただ、それで良いのでしょうか？ SDGsには17のゴールがありますが、実のところゴールを達成することが目的ではなく、パートナーシップ、連携を強化することではないかと。寄居や東松山はまさにその事例そのものだと思うのです」

端的に言えば、一人勝ちをしない。地域を巻き込んで雇用を生み、さらに利益も上がる。そういう流れ、ストーリーを展開することがSDGsだというのだ。

「その他の指定管理事業で言えば、東松山市農林公園では農家になりたいという方を受け入れて、就労支援を行っています。“ただ働き”ではなく完全雇用して、技術を身につけてもらった上で送り出しています。他にも、埼玉伝統工芸会館（道の駅おがわまち）に勤める小川和紙（細川紙・国の重要無形文化財）の職人を弊社で雇用し、2人が『埼玉県伝統工芸士』に認定されています」（植村本部長）

「また今は、長くパートナーとしてお付き合いさせていただいている浦和レッドダイヤモンドさんと、Jリーグが始めた『シャレン！』（社会連携活動）を共





▲埼玉伝統工芸会館に勤務する浅岡優索さん（右）が「埼玉県伝統工芸士」に認定された。町田哲雄代表取締役社長からも表彰を受けた

に行かせていただきたいと考えているところです」(伊藤課長)

つながるという意識が、コミュニティづくりにつながる。⑧働きがいも経済成長も、⑨産業と技術革新の基盤をつくろう、⑩住み続けられるまちづくりを、そして⑪パートナーシップで目標を達成しようというゴールが浮かんでくる。

## 一人ひとりを表彰し、つなぐ

現実的な取り組みとして、グループ会社の一つ、“廃棄物のプロフェッショナル”であるクリーンシステム株式会社の事例を、営業部第2営業グループの山崎操管理課課長に伺った。

「まずは社内からと思い、SDGsを知ってもらうことを考えました。社内的に、各支社・営業所で日常的にゴミ拾いをしていることがわかりました。これを利用して、環境省と日本財団で行っている『海ごみゼロウィーク』に応募しました。応募するとバイオマスプラスチック原料を50%配合したオリジナルデザインのゴミ袋を送ってもらえるのです。いつもと違う感覚で参加してもらえると聞いたからです。まあ、海なし県なのに、なぜ『海ごみ』なのかという説明もしましたね。

あとは県、市で募集している『パートナーズ』に登録したり、海洋ゴミをリサイクルしたグッズの制作も検討しているところです。『古着deワクチン』（売り上げの一部がポリオワクチン代になる）にも参加しています。今はそういうことを積み重ねているところです」

無理のない範囲で少しずつというのが現実的だという。冒頭のようなダイナミックな展開をしている伊藤課長からも「まだまだSDGsは他人事ですね。やはりまずは社員皆さんに認識してもらうことです」と本音



▲埼玉伝統工芸会館（道の駅おがわまち）では小川和紙の制作を実演しながら、販売も行っている。埼玉の伝統、いや日本の伝統を後世に伝え続けることもSDGsだ。

を聞かされた。

「でも、あれはいいよね」

植村営業本部長が切り出した。その名も「スポットライト表彰制度」。

「この制度は、町田社長の考えとして『社員一人ひとり、異なる個性を持っている。その個性を生かして業務にがんばっている人たちにスポットライトを当てて表彰したい』という制度です。称える、と言ったほうがよいでしょう。その人の誕生花が持つ花言葉になぞらえたメッセージを額に入れ、町田社長自らが渡してくれるのです。これを全員にとってほしいというのが、町田社長の願いです。

業務のすべてがSDGsにつながっていることを考えると、グループ社員全員の行動すべてがSDGsにつながると考えられます。これは、町田社長の誰一人取り残さず、意欲ある社員の行動を活かすSDGsの取り組みの現れだと思います」

まさに、目の前の仕事を行うこと自体がSDGsというのが、アイル・ホールディングスのグループ各社の立ち位置。そのことを全社員の皆さんが認識して、意識を高くするだけでも、大きな変化になる。人が変われば、地域も変わる。そう、社員の皆さんも会社にとっては「パートナー」。さて、アイル・グループが関わっている皆さんの街には、これからどんな変化が起こるのだろうか。

## アイル・ホールディングス株式会社

代表取締役社長 町田 哲雄

住 所 さいたま市浦和区常盤5-2-18

U R L <https://www.i-ll-group.co.jp/>